外国にルーツをもつ児童生徒
受入れ・共生のための

はじめの一歩

愛知県では、外国にルーツをもつ児童生徒が増加傾向にあります。
児童生徒の使用言語も多様化し、集住地域だけでなく、これまで外国人児童生徒等がいなかった地域にも、新たに編入・転入するケースが増えています。
外国人児童生徒等を学校に迎えることは、在籍する児童生徒や、先生方が多様な価値観や文化を知り、大きく成長できるチャンスです。

県内の小中学校では、外国にルーツをもつ児童生徒への支援・指導を進めるために、さまざまな工夫を行っています。事例集「はじめの一歩」には、外国にルーツをもつ児童生徒・保護者に対する21例の取組事例を掲載しました。

この事例集「はじめの一歩」が、初めて外国にルーツをもつ児童生徒を迎え入れる先生方に、受入れ・共生について考え、支援・指導を進めていくためのヒントになればと思います。
また、これまで外国にルーツをもつ児童生徒の支援・指導にあたってきた先生方にも、ぜひ手に取っていただき、支援・指導の在り方について、考えを広げたり、深めたりしていただきたいと思います。

愛知県義務教育問題研究協議会
愛　知　県　教　育　委　員　会
令和6年3月

受入れ準備

外国人児童生徒を受け入れる体制づくりは、どのように進めればよいですか？
また、担任や日本語指導担当には、それぞれどのような準備が必要ですか？

市の教育委員会から、教務主任に外国人児童編入の連絡がありました。
小学校４年生の児童が、外国からやって来ますが、本人も保護者も、日本に来たばかりで全く日本語が話せないそうです。
本校は外国人児童を受け入れたことがなく、まだ受入れ体制ができていません。

事例１　受入れ体制づくり

学校全体として、どのような準備が必要ですか？

こんなことをやってみました

教職員が自分の役割を認識し、連携して取り組みました。

事例集７ページ

事例２　担任の準備

担任として、どのような準備が必要ですか？

こんなことをやってみました

学校生活初日の出会いを大切にするために準備を進めました。

事例集８ページ

詳しい内容を知りたいときは、二次元コードか検索ボタンから事例集にジャンプしてください。

事例３　日本語指導担当の準備

日本語指導担当として、どのような準備が必要ですか？

こんなことをやってみました

日本語指導を行う環境を整えました。

事例集９ページ

外国人児童生徒受入れ参考リンク

・「外国人児童生徒受入れの手引　改訂版」
【文部科学省】
○ 外国人児童生徒を円滑に受入れ、教育活動を展開するうえで参考になる資料

・「相談員のための多文化ハンドブック＝子どもの教育　編＝」
【公益財団法人　愛知県国際交流協会】
○ さまざまな国の学校制度等を紹介する、外国人児童生徒の文化的な背景を理解するうえで参考になる資料

編入・転入時の面談

受入れ時の面談は、どのようなことに気を付ければよいですか？

事例４　面談で聞き取ること

外国より、小学校３年生に編入があります。児童はもちろん、保護者も全く日本語が話せません。

受入れ時の面談では、何をどのように聞き取ることが大切ですか？

こんなことをやってみました

聞き取りシート等を活用し、温かい雰囲気で面談を行いました。

事例集１１ページ

事例５　面談で伝えること

外国より、中学校２年生に編入があります。本人はもちろん、保護者も日本語が話せません。また、初めての日本の学校ということで、日本の中学校のことを全く知りません。

面談では、何をどのように伝えればよいですか？

こんなことをやってみました

画像や映像で学校の様子を伝えました。

事例集１２ページ

面談時　便利シート

【下記の文書データをダウンロードして活用してください。】

聞き取りシート　（　　年　　月　　日　記入者　　）

ふりがな 氏　名		性別		生年 月日	
日本での 呼び名		国籍		来日 年月日	
ふりがな 保護者氏名	続柄（　　）		電話		
現住所					

母　語	語	家庭内 使用言語	父（　　語）日本語：できる・できない 母（　　語）日本語：できる・できない
日本語が できる家族	いる（祖父・祖母・兄・姉・おじ・おば・　） いない	通知文書 の翻訳	翻訳不要　・　ふりがなが必要 翻訳が必要（　　語）
日本語学習歴	無　・　有（ひらがな・カタカナ・会話）	滞在期間 滞在予定	（　　）年頃まで滞在予定　・　永住予定
趣味・性格 好きな教科 得意なこと		保護者の願い 進路 将来の希望	
健康面の 留意事項 （アレルギーなど）		宗教上の 配慮事項	

転入・編入チェックリスト　　受付日：　月　日　（　）

・　年　組　　・前の学校名

1　保護者から受け取るもの

- □■❶転入学指定通知書
- □　❷在学証明書（相手校から）※編入の場合は不要
- □　❸教科書証明（市外からのみ　相手校から/市内は不要）
- □　❹その他（相手校から送られてきたものがあれば）
  ⇒通知表ファイル、ゴム印、タブレット名札、個別の支援計画 etc

2　保護者に書いてもらう書類（□…転入、■編入）

- □　■①児童生活調査票（鉛筆書き）※名前の読み方も書いておく
- □　■②健康カード
- □　■③アレルギー調査
  ■結核検診問診票　※国内ですでに内科検診を受けている場合は不要　※外国からの編入のみ
- □　■④緊急時　児童下校カード（地震・台風）
- □　■⑤個人の写真や作品の掲示・掲載について
- □　■⑥タブレット同意書/WIHI 環境の確認書
- □　■個別の指導計画　様式１（外国人児童のみ）※わたしの履歴書的な。
- □　■※前学校では、アレルギー対応、通級、特別な配慮、国際取り出し（外国人児童のみ）などを行っていたか。
- □　■⑦学費講座振替依頼書（ＪＡの通帳・銀行員）※（　）月（　）日 作成/改めて持参
- □　■⑧名札・名簿用の名前　確認用紙　※ゴム印は買わない。

「聞き取りシート」

面談時に聞き取る内容をまとめたシート
【word データ（A4　1枚）】

「転入・編入チェックリスト」

面談時に行うことのチェックリスト
【word データ（A4　2枚）】

日本語指導・教科指導

どのような体制で、どのような内容の日本語指導を行えばよいですか？

事例６　日本語指導教室の運営

来日して間もない中学校２年生のＡさんのために、持ち時間の少ない何人かの教員が日本語指導担当として指導に当たっています。複数名で指導を行っているため、同一の指導が難しい状態です。日本語指導を担当する教員たちも「何をしたらいいの？」と不安を抱えています。

連携して指導を進めていくためには、どのようにすればよいですか？

こんなことをやってみました

日本語指導用交換ファイルを作り、活用しました。

事例集１４ページ

事例７　日本語指導の内容

勤務する小学校には、日本語の習得状況や年齢が異なる複数の外国人児童が在籍しています。

どのような内容の日本語指導を行えばよいですか？

こんなことをやってみました

在籍期間や日本語習得状況等を考慮し、一人一人に合った学習内容を指導しました。

事例集１６ページ

事例８　教科の学習等での支援

小学校３年生のＡさん（外国籍）は、日常会話に支障がなく、友達と仲良く遊んでいるため、問題がないように見えます。しかし、教科の学習で読んだり書いたりすることが苦手で、授業も理解できていないようです。

どのような支援・指導を進めればよいですか？

こんなことをやってみました

教材を工夫したり、日常生活で日本語に触れる機会を多く設定したりしました。

事例集１７ページ

事例９　日本語学習の大切さ

小学校５年生のＡさん（２年生時に編入・本校で３年経過）についてです。５年生になって、日常のコミュニケーションがとれるようになってきたため、本人としては日本語学習の必要性を感じていません。

日本語学習の大切さを伝えるためには、どのようにすればよいですか？

こんなことをやってみました

日本語指導担当として児童の「話す・読む・書く・聴く」の力を見立てました。

事例集１８ページ

日本語が理解できていない児童生徒に、どのように教科指導を進めていけばよいですか？

事例１０　在籍学級での授業

小学校４年生のＡさん（編入後３か月経過）についてです。取り出しで授業を行っていますが、体育や図工、音楽等については、在籍学級で授業を受けています。しかし、在籍学級の授業では、言葉の問題もあり、理解できない様子です。

どのように授業を進めていけばよいですか？

こんなことをやってみました

活躍できる場を授業の中に設定しました。

事例集１９ページ

事例１１　授業に参加するための支援

中学校２年生のＡさん（編入後３か月経過）についてです。中学校１年生までの学習内容については母国で習得してきていますが、言葉の壁があり、授業に参加したくても参加できない状況です。

授業に参加できるようにするためには、どのような支援が必要ですか？

こんなことをやってみました

母語で学習した内容が生かせるように、支援員や教員がチームで対応しました。

事例集２０ページ

事例１２　学習意欲を向上させる支援

小学校５年生のＡさん（４年時編入・日常会話程度の日本語）についてです。子供同士でコミュニケーションはとれていますが、在籍学級での教科学習内容の理解が難しくて授業に集中できていません。そのため、授業中に寝てしまうことがあったり、欠席が増えたりしています。

前向きに学習に取り組むためには、どのような指導・支援が必要ですか？

こんなことをやってみました

教職員が連携し、意欲的に取り組める環境等を整えました。

事例集２１ページ

事例１３　特別支援教育

小学校５年生Ａさん（外国籍・８歳で来日）が転入してきました。Ａさんは、両親の仕事の関係で２回の国内転居をしており、本校は３校目になります。簡単な日常会話はできます（家庭では母語で会話）。初めの２週間は落ち着いていましたが、他の児童とのトラブルや、学習に対する後ろ向きな姿が目立つようになりました。

Ａさんが抱えている課題は、発達の特性によるものだと感じています。どのように支援・指導を進めればよいですか？

こんなことをやってみました

まずは児童の困り感を把握しました。

事例集２２ページ

保護者との連携

保護者の理解と協力を得ながら教育活動を進めていくうえで、どのようなことに気を付ければよいですか？

事例１４　家庭との連絡方法

小学校４年生のＡさん（編入後３か月経過・挨拶程度の日本語を習得）の保護者に連絡をしても、なかなか電話に出てもらえません。電話がつながっても、言葉の壁があり、伝えたいことがうまく伝わりません。普段はもちろんですが、緊急連絡時が心配です。

保護者と連絡を取り合うよい方法はありませんか？

こんなことをやってみました

保護者に連絡方法を選択してもらい、言葉の壁を低くする工夫をしました。

事例集２４ページ

事例１５　保護者の学校参加

中学校２年生のＡさん（編入後１年経過）は、すっかり日本の学校に慣れ、生き生きと生活しています。しかし、日曜日の授業参観や体育祭に保護者が参加してくれないため、寂しい思いをしています。

保護者の方に学校行事等に参加してもらうためには、どのような言葉がけが必要ですか？

こんなことをやってみました

なぜ参加できなのか、文化的背景に目を向けたうえで対応を行いました。

事例集２５ページ

事例１６　進路相談の進め方

進路相談を進めていますが、中学校２年生のＡさんも保護者も具体的な進路を思い描くことができません。

どのように進路相談を行う必要がありますか？

また、外国にルーツをもつ生徒の進路選択について、具体的な事例を紹介したくても情報がありません。どうすれば情報を得ることができますか？

こんなことをやってみました

日本の教育制度を説明したり、外部の団体と連携して情報を集めたりしました。

事例集２６ページ

保護者へのお知らせ参考リンク

・『学校からのお知らせ「やさしい日本語」例文集』
【熊本市外国人総合相談プラザ】
○ 学校から家庭への文書（「入学式の案内」「修学旅行のお知らせ」等）の文例を、やさしい日本語で紹介

・『多言語用語集』
【熊本市外国人総合相談プラザ】
○ 学校でよく使われる単語を、やさしい日本語、英語、簡体字、繁体字、ベトナム語、ネパール語、インドネシア語で紹介

共生・アイデンティティー

外国人児童生徒の居場所づくり絆づくりを進めていくためには、どのようなことが必要ですか？

事例１７　家庭内でのコミュニケーション

小学校５年生のＡさん（３年前に編入・外国と日本のダブル国籍、家庭ではカタコトの日本語で会話）の保護者から「子供は日本語を話せるようになってきたが、母語を忘れてきているため、家庭内での親子の深いコミュニケーションが難しくなっている」と相談を受けました。
児童や保護者に、どのような働きかけが必要ですか？

こんなことをやってみました

母語相談員に面談に入ってもらい、保護者と児童が抱えている悩みを把握しました。

事例集２７ページ

事例１８　悩み相談

中学校２年生のＡさん（９月編入）についてです。編入後、しばらくは周りの生徒が話しかけ、友達の輪の中にいる姿がみられました。しかし、３ヶ月ほど経った現在は、一人でいることが多いようです。さまざまな教員が、「大丈夫？」と声をかけると、「はい、大丈夫」と言うものの、表情は暗いままです。
本人や周りの生徒に、どのような支援・指導を行えばよいですか？

こんなことをやってみました

母語相談を行い、思いを聞き取りました。

事例集２８ページ

事例１９　学級での関係づくり

中学校１年生のＡさん（９月編入・ひらがなを読むことができるが意味の理解はできていない）に対して、受入れ側の生徒も話をしたいが、話をすることができず困っています。
Ａさんが周りの生徒との関係を築くために、どのような支援を行えばよいですか？

こんなことをやってみました

生活の中で楽しく関係性を育むために意図的に言語以外の関わりを設けました。

事例集２９ページ

事例２０　友達とのトラブル

小学校５年生のＡさん（４年秋編入、単語１～２個をつなげて話す程度の日本語を習得）がきっかけとなるトラブルが多く、毎日周りの児童が苦情を訴えます。このままＡさんが自分の気持ちを表現することができずに手を出してしまう状況が続き、大きなトラブルになってしまうことが心配です。
Ａさんや周りの児童に、どのような支援・指導を行えばよいですか？

こんなことをやってみました

児童Ａの母語で思いを聞き取り、周りの児童の対応改善を図りました。

事例集３０ページ

事例２１　アイデンティティーを確立する

小学校６年生のＡさん（日本生まれ、日本育ちの外国籍）についてです。就学前から日本人の子供たちと教育を受けてきたため、言語の不自由さは感じていませんでした。しかし、自分の母国に自信をもつことができないため、自分の大切なルーツを隠してしまう傾向があります。
本人がアイデンティティーを確立するためには、どのような支援・指導が必要ですか？

こんなことをやってみました

ワールドウィークを行いました。

事例集３１ページ

事例１　受入れ体制づくり　【受入れ準備】

市の教育委員会から、教務主任に外国人児童編入の連絡がありました。

小学校4年生の児童が、外国からやって来ますが、本人も保護者も、日本に来たばかりで全く日本語が話せないそうです。

本校は外国人児童を受け入れたことがなく、まだ受入れ体制ができていません。

学校全体として、どのような準備が必要ですか？

このような準備を進めました【学校全体として】

○　役割分担を明確にし、受け入れる準備をしました

外国人児童が本校に編入するのは初めてだったため、誰が何を担当するのか役割分担を明確にしたうえで、準備を進めました。主な準備は以下の通りです。

校長……教育委員会や外部団体との連絡調整
通訳者や支援員の手配等を行いました。

教頭……編入時の面談で用いる資料作成
文化や習慣の違いに配慮し、学校生活を映像等で伝える資料を作成しました。

教務主任…編入時の面談で聞き取る内容確認
通常の転入時の確認事項とは別に、生育歴や家庭内言語、宗教上の配慮事項等を確認する必要があるため、「聞き取りシート」を準備しました。

学級担任…初日の受入れ準備
少しでも安心して学校生活をスタートできるように、編入児の保護者の理解を得たうえで学級の子供たちと編入児の母国や母語について調べ、母語の挨拶で迎え入れたり、生活するうえで利用する場所や物に、母語訳を掲示したりしました。

日本語指導担当（教務主任が中心）…日本語指導計画作成
日本語初期指導を行うための計画（編入児用の2週間分の時間割）を作成しました。全く日本語を話すことができないため、日本語初期指導については教務主任が中心となり、学級担任のない4名の教員で担当しました。

給食担当…給食にかかわる、アレルギーや宗教上の配慮の確認
メニューを見て自分で除去するのか、弁当を持参するのか等の確認をしました。給食がない国もあるため、通訳者を通して丁寧に説明したうえで対応を決めていきました。

全教職員…情報共有・共通理解、共生の視点で日本人児童への働きかけ
すべての教職員で共通理解を図って支援・指導に当たっていく必要があるため、帰りの打合せの際に情報共有の時間を設けるようにしました。

準備を進めるうえで留意したこと

○　すべての教職員が自分の役割を認識し、連携して取り組みました

役割分担を明確にするとともに、帰りの打合せの際に情報共有の時間を設けたことで、一人一人の教職員が自分の役割を認識し、共通理解を図ったうえで、連携して受入れ準備を進めることができました。

もっと知りたい

「外国人児童生徒受入れの手引き改訂版」（P12～）【文部科学省】
学校管理職の役割が紹介されています。

「外国人児童生徒教育資料」【豊橋市教育委員会】
外国人児童生徒教育の手引き（豊橋市教育委員会作成）が掲載されています。

事例２　担任の準備　【受入れ準備】

市の教育委員会から、教務主任に外国人児童編入の連絡がありました。

小学校4年生の児童が、外国からやって来ますが、本人も保護者も、日本に来たばかりで全く日本語が話せないそうです。

担任として、どのような準備が必要ですか？

このような準備を進めました【学級担任として】

○　受入れ時の面談のときに、次のことを確認しました

【本名】

・　名前は個人のアイデンティティーの根源ですので、本名と発音を確認しました。

【趣味や特技(教科、食べ物、スポーツ、ゲーム等)】

・　趣味や特技を聞き、本人の強みを知っておくことが、今後の指導・支援に生きます。

【学校生活】

・　日課や給食や掃除等を、親子に説明することで、学校生活のイメージをもってもらえます。

・　給食は、ある日のメニューや給食当番の様子等を写真や動画で伝えました。

○　このような準備をしました

【机、いす、名前マグネット等】

・　座席は、教員の目が届き、周りの様子が分かる2列目にしました。
（通訳やサポート担当がつく場合は後列にしました）

【名簿の更新、係やクラブ、委員会等の所属】

・　サポートを受けることができるクラブや委員会を確認しておきました。

【教科書やノート、持ち物、宿題】

・　漢字表記のものもあります。母語を書いたシールを貼るなどのサポートをしました。

・　できることから取り組ませたいと考え、連絡帳については、最初は担任が内容を記入し、本人が日付を書くようにしました。

・　編入後から取り組める宿題を準備しました（挨拶や名前を書く練習等）。児童に寄り添いながら、家庭学習に取り組むことの意識づけとなるよう進めました。

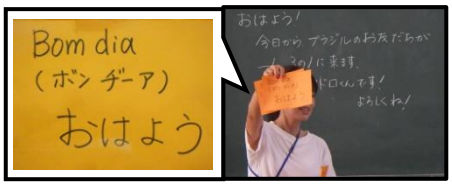
【学校探検、給食支援】

・　翻訳ツール等を片手に、トイレの場所や使い方、保健室等を伝えました。

準備を進めるうえで留意したこと

○　温かい雰囲気で学級に迎え入れました

たとえ言葉が通じなくても、本人やクラスメイトにとってよい出会いとなるよう、編入児の母語で自己紹介やみんなで挨拶をするなど、温かな雰囲気で迎えることを心がけました。



もっと知りたい

「かすたねっと」
【文部科学省の情報検索サイト】
指導・学習に利用できる多言語対応の教材・資料や、保護者へのお知らせに利用できる多言語対応の文書等が検索できます。

「多文化共生学校づくり支援サイト」
【公益財団法人　滋賀県国際協会】
学校で使う言葉の 7 言語訳（ポルトガル語・スペイン語・英語・中国語・タガログ語・ハングル・ベトナム語）の一覧表が掲載されています。

事例３　日本語指導担当の準備　【受入れ準備】

市の教育委員会から、教務主任に外国人児童編入の連絡がありました。

小学校4年生の児童が、外国からやって来ますが、本人も保護者も、日本に来たばかりで全く日本語が話せないそうです。

日本語指導担当として、どのような準備が必要ですか？

このような準備を進めました【日本語指導担当として】

○　日本語指導を行う環境を整えました

【教室環境整備】

日本語指導を行う教室を決め、その教室の掲示物を整えたり、児童の身長に合った机と椅子を用意したりするなど、快適に学習することができる環境を整えました。

- 黒板、ホワイトボード
- 掲示物、絵図鑑
- カレンダー（月ごと）
- 時間割（取出児童が分かるもの）
- TV、タブレット
- 時計、タイマー
- 50音表（ひらがな、カタカナ）

【教材準備】

児童の日本語の習得状況に合わせた日本語教材を用意しました。教材を調べ始めると多くの教材や教具がありましたが、教えやすいものを見つけ、指導の軸にしました。

外国人児童生徒等をたくさん受け入れている教育委員会が作成した日本語指導の教材も参考にしました。

○　母国や母語について調べました

編入する児童の不安を少しでも軽減できるように、児童の母語で挨拶等ができるように調べました。また、文化（生活習慣・教育制度・宗教等）の違いによるトラブルやすれ違いが生じないように、児童の母国の文化について調べました。

「相談員のための多文化ハンドブック　＝子どもの教育編＝」（公益財団法人愛知県国際交流協会）で調べてみると、児童の母国では、おやつや軽食を持参して休憩時間に食べる学校や、学校内に売店が併設されている学校があることが分かりました。そのような情報は必要に応じて教職員で共有しました。

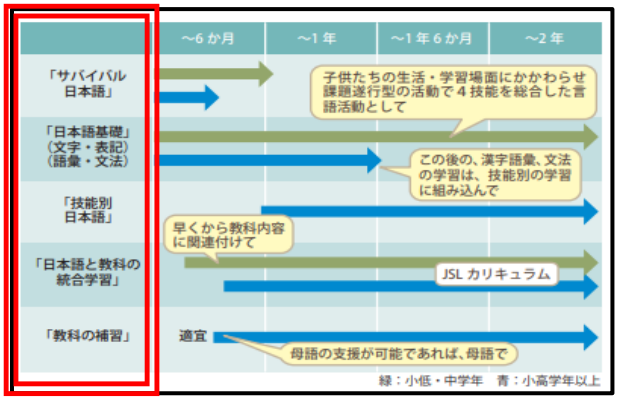
○　日本語指導の内容や指導方法を計画しました

「日本語指導のプログラム」（資料１朱線部分）をもとに指導内容や指導方法を計画しました。

全く日本語が話せないとのことだったので、日本の学校で生活するための日本語（サバイバル日本語等）指導の準備をしました。

また、「個別の指導計画」（指導に関する記録）を作成するとともに、児童の実態に合わせて、日本語指導の指導計画（資料2）を作成しました。来日直後のため、まずは2週間分の計画を立てました。

【資料１　コース設計　プログラムの組み合わせ例　「文部科学省」】



【資料２　児童の実態に合わせて作成した日本語指導の計画　第１週】

指導計画　第１週　　☆担当者教材　◇日本語ワークブック①,②　　◆日本語指導　　★在籍学級での授業。※留意点

第１週	1日目　　/　　（ ）	2日目　　/　　（ ）	3日目　　/　　（ ）	4日目　　/　　（ ）	5日目　　/　　（ ）
１限	☆担当者紹介＆日本語指導教室の役割などを伝える ☆自己紹介をしよう ◇①『挨拶』 ☆時間割や１日流れの確認	※朝の会の様子や移動 学級から日本語指導教室へ ☆学校探検！ ・校長室，保健室，職員室 ☆クラスや担任の名前 ☆「何ですか？」	☆挨拶・前日の活動の復習 宿題ﾁｪｯｸやテスト etc ◆「ぼく/わたし」 ◆「いる/いらない」	☆挨拶・前日の活動の復習 宿題ﾁｪｯｸやテスト etc ◇①『ぶんぽうぐ』！ ・名称を覚えよう ◆「ある/ない」	☆挨拶・前日の活動の復習 宿題ﾁｪｯｸやテスト etc ◇①『からだ』 ・名称を覚えよう ・「〇〇～が，いたいです」 ◆「こう・そう・ちがう」
２限	★在籍学級での図工	★在籍学級での音楽	★在籍学級での道徳	★在籍学級での理科	★在籍学級での社会
３限	★在籍学級での体育	★在籍学級での外国語活動	★在籍学級での理科	★在籍学級での体育	★在籍学級での体育
４限	◇①『トイレ』（放課も可） ◆「いい/だめ」 ◆「わかる/わからない」◇給食 ・給食の存在や流れ ・好き嫌い，ｱﾚﾙｷﾞｰ etc 確認	・復習テスト「名前」 ◇①ひらがな ・あ行 ※筆順，鉛筆の持ち方など ☆前日の活動の復習	・復習テスト「あ行」 ◇①ひらがな ・か行 ◇『れんらくちょう』 ※意義や保護者のﾁｪｯｸ etc ☆前日の活動の復習	・復習テスト「さ・た行」 ◇①ひらがな ・さ行・た行 ☆連絡帳，明日の活動など	・復習テスト「な・は行」 ◇①ひらがな ・な行・は行 ☆連絡帳，明日の活動など
宿題	・名前練習 ・数字の書き方練習	・ひらがな「あ行」 ・算数プリント	・ひらがな「か行」 ・算数プリント	・ひらがな「さ・た行」 ・算数プリント	・ひらがな「な・は行」 ・算数プリント

準備を進めるうえで留意したこと

○　安心して学校生活がスタートできるように準備しました

編入する児童が安心して過ごせるよう、日本語指導教室の教室環境を整えました。また、文化（生活習慣・教育制度・宗教等）の違いによるトラブルやすれ違いが生じないように、相手の母国の文化について調べ、必要に応じて教職員で共有しました。

○　日本語指導の内容や指導方法を計画しました

児童の実態に合わせて、日本語初期指導の指導計画を作成しました（日本語指導のコース設計）。指導計画は、児童の実態に合わせるため、頻繁に見直しを行っています。

「個別の指導計画」（指導に関する記録）を作成しました。指導計画は定期的に振り返り、改善をするとともに、他の指導者との共有資料として活用しています。

もっと知りたい

「相談員のための多文化ハンドブック ＝子どもの教育編＝」
【公益財団法人　愛知県国際交流協会】
さまざまな国の義務教育の概要を掲載されています。

「DLA（外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント）」
【文部科学省】
「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント（DLA）」の資料が掲載されています。

「個別の指導計画（児童生徒に関する記録）（学習に関する記録）」
【文部科学省・学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の施行について（通知）】
個別の指導計画の様式や記入例が掲載されています。

「外国にルーツをもつ子どもたちの学習目標例」
【愛知教育大学 外国人児童生徒支援リソースルーム】
個別の指導計画を作成する際に参考となる資料が掲載されています。

事例４　面談で聞き取ること　【編入・転入時の面談】

外国より、小学校3年生に編入があります。児童はもちろん、保護者も全く日本語が話せません。

受入れ時の面談では、何をどのように聞き取ることが大切ですか？

このような面談をしました

【資料１　確認する内容】

- ☐ 氏名・呼称・性別・住所・生年月日
- ☐ 保護者氏名・続柄　☐ 来日年月日・在留期間
- ☐ 緊急連絡先（自宅・職場）　☐ 母語・国籍
- ☐ 家族構成・使用言語　☐ 通訳ができる家族・知人
- ☐ 日本語学習歴・母国での就学歴
- ☐ 保護者の願い（進学・学費等）
- ☐ 健康面の留意事項（結核検査・食物アレルギー等）
- ☐ 宗教上の配慮（必要な場合）　等

児童と保護者に参加していただき、面談を行いました。学校側は、校長、教務主任、担任、英語専科です。当日、通訳者の手配ができなかったため、英語専科も同席しました（父親が母語以外に英語が話せたため）。ただし、英語は父親の母語ではないため、相手にどの程度伝わっているかを確かめながら面談を進めました。確認した内容は、資料１「確認する内容」の通りです。

面談当日は、限られた時間の中で、児童の母語や文化、来日に至る背景、家庭環境等を漏れなく聞き取るため、「聞き取りシート」を利用して面談を進めました。

【通訳者の手配について】

- 面談では、保護者の困り感や不安を共有することも大切なため、可能な限り通訳者と一緒に話ができるように進めています。
- 事前に市教育委員会に通訳者を依頼しました。通訳者が手配できない時は、保護者の親族等で日本語が話せる方がいれば同席してもらっています。

【通訳者がいない場合】

- 通訳者がいない場合は翻訳機等を用いて面談を進めました。あくまで機械であるため、正しく通じているかどうか相手の表情等からも確認するよう心がけました。

【他校からの転入の場合】

- 在籍していた学校で、「特別の教育課程」を実施していた場合、保護者や在籍していた学校と連絡を取り合い、「特別の教育課程」を引き継ぎました。

面談を進めるうえで留意したこと

○　聞き取りシートを活用しました

児童に対する理解を深め、児童や家族について確実に把握するために、外国人児童用の聞き取りシートを活用しました。また、豊橋市教育委員会HP「外国人児童生徒指導資料」には、翻訳文書データ（編転入時の手続きの確認事項と必要な書類等）が掲載されており、活用できます。

○　温かい雰囲気で進めるために、必要な資料を準備しておきました

児童や保護者の不安を軽減するために、心配なことを受け止めるような温かい雰囲気の面談を心がけました。そのため、面談にかかわる資料等を事前に準備しておき、ゆとりをもって面談に臨みました。

また、生育歴や来日の背景、母国の文化、好きな教科や得意なこと、在留期間等、本人を理解するために必要な情報も聞き取りました。

もっと知りたい

「外国人児童生徒受入れの手引き 改訂版」（P13）【文部科学省】
温かい面接の工夫等について掲載されています。

「外国人児童生徒教育資料」【豊橋市教育委員会】
転編入時に活用できる翻訳文書が掲載されています。

事例５　面談で伝えること　【編入・転入時の面談】

外国より、中学校2年生に編入があります。本人はもちろん、保護者も日本語が話せません。また、初めての日本の学校ということで、日本の中学校のことを全く知りません。

面談では、何をどのように伝えればよいですか？

このような面談をしました

面談当日は、保護者と本人に参加していただきました。

学校側の参加者は、教務主任、学年主任、担任の3名です。通訳者が手配できなかったため、面談は、翻訳機を使いながら進めました。

面談の最初に、保護者と本人から母国の学校での様子（タイムスケジュール、教科学習等）を聞きました。

その後、学校側から、資料１「伝える・確認する内容」を伝えました。

【資料１　伝える・確認する内容】

- ○ 学校生活や校則の説明
  - ・学校の一日の流れ、主な行事予定
  - ・欠席、遅刻時の連絡方法
  - ・通学路
    （自転車通学の際は、ヘルメット着用）
  - ・部活動
- ○ 教育関係費用の説明
  - ・授業料、教科書は無償
  - ・給食費、学年費
  - ・補助教材、修学旅行・野外活動費
- ○ 必要な学用品等の説明
  - ・通学時の制服や持ち物
  - ・制服等学指定物品の購入方法
    （購入可能な店名や場所を伝える）
  - ・学校で使う文房具
- ○ 保護者の記入が必要な書類
  - ・緊急連絡先
  - ・災害時引き渡し先
  - ・口座振替依頼書
- ○ 特別な配慮の有無（健康面、宗教上　等）
- ○ 中学校卒業後の進路
- ○ 初登校日の時間、場所、持ち物
- ○ 登校当初の学習内容
  （取り出しで日本語初期指導を行う等）
- ○ 支援サービスの案内

○　視覚的に伝えました

学校生活については、入学説明会等で使用する資料を利用し、説明を進めました。また、学校のホームページを見せ、学校行事の様子や生徒の様子を視覚的に伝えました。

連絡先等、保護者の記入が必要な書類については、説明をしながら面談の場で記入してもらいました。

○　すぐに必要なもの、そうでないものを伝えました

中学校では、制服等、学校指定の物品が多くあります。購入できる店名を示し、地図を見ながら購入先を紹介しました。購入物品については、入学説明会で使用する資料を見せながら行いましたが、すべて準備すると高額になるため、すぐに必要なもの（鞄、上履き、制服の冬服等【10月のため】）と、後々必要となるもの（夏服等）を別々に伝えました。

○　進路について確認しました

今後の進路については、現段階の思い・願いを確認しました。最初の面談では、母国に帰国する予定なのか、日本の学校への進学を希望するのかのみを確認し、子供の将来にかかわる大切なことであるため、詳しくは、後日通訳者を交えて相談をすることとしました。

編入後、しばらくは個別で日本語初期指導を行うことを伝えるとともに、時間割と教科の確認をし、本人の好きな教科を教えてもらいました。

最後に、校内を案内して、靴箱の使い方等を伝え、最初の登校日の持ち物や時間を確認して、面談を終えました。

【通訳者の依頼について】

・　面談では、保護者の困り感や不安を共有できるよう、事前に市の教育委員会に通訳者を依頼しています。

【通訳者がいない場合】

・　今回は通訳者がいなかったため、翻訳機等を用いて面談を進めました。あくまで機械であるため、正しく通じているかどうか相手の表情等からも確認するよう心がけました。

面談を進めるうえで留意したこと

○　画像や映像で伝えました

入学説明会等で使う学校説明や、ホームページ等を使用し、視覚的に学校の様子や生徒の様子を伝えました。保護者や本人も具体的にイメージすることができ、安心感をもつことができたようです。また、実際の時間割も示し、１日の時間の流れや、登下校の時間等も確認しました。

○　温かい雰囲気で進めました

生徒や保護者が安心して学校生活を始められるよう、温かい雰囲気での面談を心がけました。生徒や保護者を不安にさせないためにも、面談で伝える内容や伝え方を、管理職や学校側の参加者で事前に確認しておくことも大切だと考えます。

○　相手の母国の文化に目を向けました

母国の文化や学校の様子を面談の際に聞くことを心がけました。文化的背景の違いから、こちらの伝えたいことが伝わらない場合が少なくありません。相手の文化や習慣等を理解したうえで、日本の学校生活等を伝えるようにしました。また、そのような働きかけが、生徒や保護者に寄り添う姿勢につながると考えました。

○　現時点での進路について確認しました

日本の滞在期間や生徒の進路についての話題にも触れました。今後の進路指導の手がかりとなるよう、日本の高等学校に進学するのか、帰国するのか等、現時点での保護者と本人の意向を確認しました。

○　本人の好きなことを共有しました

面談となると、事務的な内容が中心になったり、学校生活を伝えることに終始してしまったりしがちです。もちろん、それらも大切なことですが、生徒本人の性格や好きなこと、得意なことも聞くように心がけました。その情報が、日本語初期指導時間の設定や編入する学級決めに役立つかもしれないと考えたからです。

もっと知りたい

「外国人児童生徒受入れの手引き 改訂版」（P13）【文部科学省】
温かい面接の工夫等について掲載されています。

「かすたねっと」【文部科学省】
外国人児童・保護者向けに日本の学校生活を紹介する動画が掲載されています。

事例６　日本語指導教室の運営　【日本語指導・教科指導】

来日して間もない中学校2年生のAさんのために、持ち時間の少ない何人かの教員が日本語指導担当として指導に当たっています。複数名で指導を行っているため、同一の指導が難しい状態です。日本語指導を担当する教員たちも「何をしたらいいの？」と不安を抱えています。

連携して指導を進めていくためには、どのようにすればよいですか？

このように日本語指導教室を運営しています

日本語指導担当として、教務主任を中心に、各学年の学年主任、進路指導主事、担任の合計6名が、週に1時間ずつ日本語指導を行っています。

まず、教務主任が個別の指導計画を作成し、A さんが必要としている日本語指導の内容を共通理解できるようにしました。

次に、日本語指導の1時間授業の流れ（資料1）を統一し、原則、この流れで授業を行うようにしました。授業に基本的な流れがあることで、どの教員が担当しても、生徒が大きく混乱することなく学習を進めることができました。

指導資料としては、『初期指導用冊子（市作成）』、『ひらがな・かたかなワーク（愛知教育大学作成）』を使用し、担当する教員は前時担当した教員が行った続きから授業を始めることとしました。

また、『初期指導用冊子（市作成）』をもとに、教務主任と担当教員で初期指導プログラムの内容を確認し、そのプログラムに沿った学習を進めることで指導内容の共通理解を図りました。

【資料１　日本語指導の１時間の流れ】

①対話活動
- ・基本的な挨拶
- ・学級での活動等日常会話

②初期指導冊子を用いた日本語学習または教科に準ずる学習
- ・名詞や形容詞
- ・学級での活動の補助　等

③ワークを用いた「書く」指導
- ・短文の作成　等

さらに、日本語指導担当用の交換ファイル（資料2）を作成しました。授業を行った教員が交換ファイルに学習内容を記録し、次の教員に渡すこととで、学習進度や前時までの生徒の様子を把握できるようにしました。こうすることで、例えば前時に理解が不十分だった箇所は、本時にもう一度取り組むなど、教員が代わっても、生徒の実態に合わせた指導ができました。

【資料２　日本語指導担当用交換ファイル】

年　　組　　生徒名【　　】

月　日	初期指導冊子	ワーク	その他
5/25 記入者 【　　】	③　～P５まで 「色」はかなり習得。 次回「あつい」の再確認が要。	・かたかな練習 「スポーツ」	・体育祭の種目について説明。楽しみな様子。

加えて、教務主任が中心となり、定期的に担当教員や担任との情報交換を行いました。情報交換の内容を受けて、指導計画や学習内容の見直しを行い、生徒に合った学習が進められるようにしました。見直しの際には、日本語初期指導を行っている市の支援員からの情報やアドバイスも参考にしました。

学習内容や進め方を統一すること、情報交換を通して生徒の実態を正確につかみ、学習内容等の改善を図ることで、有効な日本語初期指導を行うことが可能となりました。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　指導計画を作成し、学習内容の共通理解を図りました

生徒の実態をつかみ、指導計画を作成しました。学習に使う教材は統一しました。指導計画は、生徒の実態に合わせて定期的に見直しをしました。

○　情報交換を大切にしました

生徒は日々学びを広げています。教員同士の情報交換を行い、生徒の実態に合った指導ができるようにしました。また、ファイルやノートを使った情報交換では、生徒のつまずきだけではなく「できた」ことも記載するようにしました。

もっと知りたい

「外国人児童生徒受入れの手引き 改訂版」（P17）【文部科学省】
日本語指導の環境づくり等について掲載されています。

「外国人児童生徒受入れの手引き 改訂版」（P22）【文部科学省】
日本語指導担当の役割等について掲載されています。

「日本語指導ハンドブック」【東京都教育委員会】
日本語指導の指導内容ごとに指導のポイントや留意点、ワークシート等が掲載されています。

「学校教育における JSL カリキュラム（中学校編）」【文部科学省】
外国人生徒が「日本語で学ぶ力」を身に付けることができるように作成されたカリキュラムが掲載されています。

「外国にルーツをもつ子どもたちの学習目標例」【愛知教育大学 外国人児童生徒支援リソースルーム】
指導計画を作成する際に参考となる学習目標例が掲載されています。

「外国人児童のための学習教材」【愛知教育大学 外国人児童生徒支援リソースルーム】
ひらがな教材・教科教材以外にも保護者支援の冊子等が掲載されています。

【外国にルーツをもつ子どもたちの学習目標例】

事例７　日本語指導の内容　【日本語指導・教科指導】

勤務する小学校には、日本語の習得状況や年齢が異なる複数の外国人児童が在籍しています。
どのような内容の日本語指導を行えばよいですか？

このような内容を行っています

児童一人一人の実態（来日時期、滞在期間、発達段階、日本語の習得状況、生活への適応状況等）に合わせた個別の指導計画を作成して、「特別の教育課程」による指導を行っています。

「特別の教育課程」による指導計画（コース設計）については、「コース設計　プログラムの組み合わせ例」（資料１）を参考に、日本語指導の１週間の時間数や、どんなプログラム（「サバイバル日本語」「日本語基礎」「技能別日本語」「日本語と教科の統合学習」「教科の補習」）を、どのようなペースで行うかを決めて、設計しています。

例えば、来日したばかりで全く日本語が話せない児童は、学校生活のあらゆる場面で困難さに直面するため、「サバイバル日本語」や「日本語基礎」を中心に指導しています。

日常会話程度の日本語が話せる転入生については、転入時に語学相談員や教員が「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント（DLA）」と「外国にルーツをもつ子どもたちの学習目標例（資料2）を用いて、「話す」「読む」「書く」「聴く」の4技能について、子供が、今何ができて、何ができていないか確認しました。そのうえで、学習目標項目例を参考にしながら、コース設計をしています。

【資料１　コース設計　プログラムの組み合わせ例「文部科学省」】

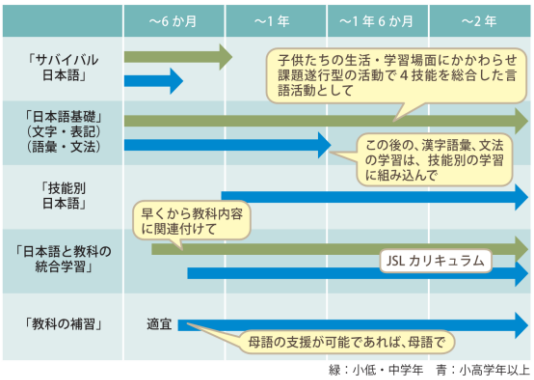


図3-3：コース設計　プログラムの組み合わせ例

【資料２　外国にルーツをもつ子どもたちの学習目標例「愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルーム」】

話　す

JSL 評価参照枠のステージ	指導の段階		「個別の指導計画」のための学習目標項目例	○他技能との関係 ●指導のヒント
3	教科につながる初歩的な学習	a	聞きなれた言葉を組み合わせて，自分自身のことや身近な出来事について，主に単文を使って話す。（例：好き嫌い，毎日の習慣，昨日あったことなど）	●まだ文法的な間違いが多く，語彙も多くないが，子どもの発言の主旨を汲み，やりとりの中で表現したい内容を引き出し，不足している語彙や表現を補充して，いいモデルを示す。 ●単語レベルで答えられる質問から，文レベルの答えが必要な質問へと変えていく。
		b	日常的な内容についての質問に，簡単な日本語で自分の感想や考えを言う。	
		c	学校生活や学習場面で必要となる要求表現等を，簡単な日本語で伝える。	
		d	学校生活で必要となる場面で，質問をする。	
		e	自ら，一対一の会話に参加する。	
4	教科につながる基礎的な学習	a	連文（2，3 文）を使って，日常の出来事（過去の経験を含む）や学習のことについて，意味の通じる話をする。	○日常的な会話が流暢にこなせるようになる。 ●朝の会での短いスピーチなど，日本語使用の機会を増やす。 ●普段あまり聞かない教科と関連した語彙や表現はまだ使えないので，その点に留意した指導が必要である。 ●取り出し指導で学んだことが，在籍学級の学習の場で活かせるような教員間の情報共有が大切である。
		b	自分から質問したり，説明したりして，教科学習にある程度参加する。	
		c	教科と関連のあるテーマで，自分の意思や相手に伝えるべき内容を，簡単な日本語で発表する。	
		d	授業の中でグループ学習に参加する。	

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　一人一人に合わせたコース設計をしました

児童一人一人に合わせた個別の指導計画を作成して「特別の教育課程」による指導等を行いました。対象となる児童に対する指導の期間、頻度等を決めると同時に、どのようなプログラムを、どのようなペース（順序と時間的な配置）で教えるかを大切にしました。

○　翻訳アプリに頼りすぎないようにしました

日本語初期指導は、翻訳アプリに頼りすぎないように進めました。翻訳アプリを活用することで子供がいつまでも母語に頼り、日本語の習得が遅れることがあるからです。

もっと知りたい

「研修動画 コンテンツ3 日本語指導の方法 Ⅰ」
【文部科学省】
日本語指導のコース設計についての動画を視聴できます。

「外国にルーツをもつ子どもたちの学習目標例」
【愛知教育大学 外国人児童生徒支援リソースルーム】
指導計画を作成する際に参考となる学習目標例が掲載されています。

事例８　教科の学習等での支援　【日本語指導・教科指導】

小学校3年生のAさん（外国籍）は、日常会話に支障がなく、友達と仲良く遊んでいるため、問題がないように見えます。しかし、教科の学習で読んだり書いたりすることが苦手で、授業も理解できていないようです。

どのような支援・指導を進めればよいですか？

このような支援・指導をしました

「今日何して遊ぶ?」「サッカーしよう」というような生活面で使う言葉（生活言語）は、習得するのに1～2年かかります。友達同士で会話が成立しているため、日本語は大丈夫だと思われがちですが、教科用語等、学習でしか使わない言葉（学習言語）の習得には5～7年かかると言われています。生活言語は日常生活を送る中で次第に習得することができますが、学習言語に関しては、教科学習を通して習得するものです。

○　授業で扱う語彙や日本語表現の指導でイラスト等を利用しました

児童の日本語レベルに応じて、指導が必要と予想される語彙や表現をピックアップし、スライドで写真やイラストを提示しながら、語彙を視覚的に理解できるようにしました。

○　国語の物語文、説明文でリライト文を活用しました

児童の日本語レベルに合わせて、リライト文を活用したところ、全体の内容を把握させるのに役立ちました。また、国語が苦手な児童でも、内容の読み取りがしやすくなり、学習意欲につながりました。

○　在籍学年の漢字学習を進めながら、下学年の内容についても指導しました

小学校3年生の漢字学習を進めながら、できないところは1、2年生に戻り、段階的に指導しました。学年ごとに漢字プリントを用意し、漢字の読みを確認した後、書き取り練習を定期的に実施しました。90点以上を合格とし、合格シールを貼れるようにしたところ、児童の意欲が増しました。

○　日記指導を行いました

拾い読みしかできなかった児童が、日記に取り組むことで、言葉のまとまりで文字を読んだり書いたりできるようになり、苦手意識を和らげました。時には、その日記帳に教員が日記を書いたところ、「先生のことが知りたい」「自分のことを伝えたい」という気持ちが高まりました。

○　クラスで図書館を利用する機会を多くもちました

絵本や漫画等、児童が興味をもちやすい本に触れさせました。児童の段階に応じて、漫画でもよいので、とにかくたくさんの日本語を読むことができるようにしました。今まで本を1冊も借りなかった A さんが、自分から図書館に行くようになりました。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　日常生活で、日本語に触れさせる機会を多く設けました

強制的に学ばせるのではなく、日本語の文を読みたいと思えるような支援を行いました。語彙や日本語表現の意味を教えるだけでなく、日常生活の中で、その言葉を使ってアウトプットする機会を多く設定しました。

もっと知りたい

「岩倉市日本語適応指導教室」
【岩倉市教育委員会】
各教科で活用できる教材データが掲載されています。

事例９　日本語学習の大切さ　【日本語指導・教科指導】

小学校5年生のAさん（2年生時に編入・本校で3年経過）についてです。5年生になって、日常のコミュニケーションがとれるようになってきたため、本人としては日本語学習の必要性を感じていません。

日本語学習の大切さを伝えるためには、どのようにすればよいですか？

このような支援・指導をしました

○　Aさんの日本語の力を把握し、次の目標をAさんと教員で共有しました

A さんの課題を明らかにするため、語学相談員に依頼し、「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント（DLA）」や、「外国にルーツをもつ子どもたちの学習目標項目例」（資料１）を用いて、A さんの日本語の力（「話す」「読む」「書く」「聴く」）を把握しました。

【資料１外国にルーツをもつ子どもたちの学習目標例
「愛知教育大学リソースルーム」】

2	初期指導（後期）	c	小学校１年で学習する漢字をいくつか書く。（象形文字や指示文字）	○話し言葉をそのまま文字にしようとする。 ●多少地域特有の言い回しが混じっても，容認する。 ●生活日記などを通して，「です・ます」の文章に慣れさせる。
		d	助詞の「は」，「へ」及び「を」を正しく書く。	
		e	平仮名や片仮名や基礎的な漢字を使い分けて文を書く。	
		f	毎日の生活に関する事柄について，頻度の高い単語や定型表現，基本文型などを使って，連文（2，3文）を書く。（例：3～5行程度の生活日記など）	
		g	自分と関係のあるテーマについて，日常よく使われる語彙や慣れ親しんでいる表現を使って，短い文を書く。	

その結果、A さんは、「話す」「聴く」力は「ステージ4程度」なのに対して、「書く」力は「ステージ2e 程度」と低いことが分かりました。

※「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント（DLA）」や「外国にルーツをもつ子の学習目標項目例」では、それぞれの技能（「話す」「読む」「書く」「聴く」）について、1～6のステージごとにレベルや目標例が設定されています。

その後、A さんに、最近実施した運動会について「運動会でしたことと、感想を書きましょう」（「書く」ステージ3d～f程度）と伝えたところ、「何から書いたらよいか分からない」「感想って何を書いたらいいの」と、活動が止まってしまいました。

これらのことから、「書き方（書き出し方）」や「感想と聞かれたときの述べ方」が身に付いていないことが分かりました。その課題を、A さんだけではなく、担任や日本語指導担当でも共有し、A さんと一緒に目標を設定しました。

後日、日本語学習の授業の中で、5W1Hに沿った日記指導を行いました。そこでは、感じたことを文章にする活動等に意欲的に取り組む A さんの姿が見られました。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　日本語の力を適切に把握し、学習目標を設定する

児童生徒が「話す」「読む」「書く」「聴く」の4技能それぞれについて、何ができていて、何ができていないかを把握したうえで、学習目標を設定することで、意欲的に学習に取り組む姿が見られました。

もっと知りたい

「研修用動画コンテンツ 2 外国人児童生徒等教育の考え方」【文部科学省】
外国人児童生徒等の状況を把握して、ことばの教育のあり方を考えるための研修動画が視聴できます。

「DLA（外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント）」【文部科学省】
「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」の資料が掲載されています。

「 外国人児童生徒受入れの手引 改訂版 」（P27）【文部科省】
日本語指導のプログラムについて掲載されています。

「外国にルーツをもつ子どもたちの学習目標例」【愛知教育大学 外国人児童生徒支援リソースルーム】
指導計画を作成する際に参考となる学習目標例が掲載されています。

事例 10　在籍学級での授業　【日本語指導・教科指導】

小学校4年生のAさん（編入後3か月経過）についてです。取り出しで授業を行っていますが、体育や図工、音楽等については、在籍学級で授業を受けています。しかし、在籍学級の授業では、言葉の問題もあり、理解できない様子です。

どのように授業を進めていけばよいですか？

このような支援・指導をしました

授業では、支援員の配置や、児童の座席について配慮しました。座席の位置は、A さんが担任とコミュニケーションが取りやすく、周りの児童の様子も把握しやすい、教室の前から2列目、中央付近にしました。

社会や理科の授業では、身振り手振りで伝えることが難しいため、具体物を用意したり、視覚的な資料を掲示したりしました。また、使用するプリントにはルビをつけるなどの支援をしました。

国によっては、音楽や体育等の授業がない国もあります。言葉や文化の壁を低くし、主体的に参加できるよう、体育の授業では、視聴覚教材を利用したり、グループ活動を多めに取り入れたりしました。図工の授業では、視覚的に分かりやすい制作例を示しました。また、最初は教員が一緒に制作することで、活動が進みました。

音楽の授業では、音楽の授業がない国から来た場合は、そもそも「リコーダーを演奏したことがない」ことも考えられるので、日本語指導教室で取り出した時に、事前に音階について説明し、リコーダーの練習をしました。

在籍学級の授業で指示を出すときは、できるだけ「やさしい日本語」を使うように心がけています。一文を短くし、一文に一つの情報に留めるようにしたことで、A さんはもちろん、これまで指示が通らなかった在籍学級の子供たちにも支持が通るようになりました。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　いろいろな方法でコミュニケーションを図りました

授業では「やさしい日本語」を使うようにしました。他にも、身振り手振り（指差し・ジェスチャー）で伝えたり、相手が聞き取れるようにゆっくり大きな声で話したり、文字を大きくしたりと、いろいろな工夫をしました。板書やプリントの言葉も、中国から来た子供には、ひらがなで書くより漢字で書いた方が伝わるかもしれません。一方で、アメリカから来た子供には、ローマ字で書いた方が伝わるかもしれません。いろいろ試しながら、お互いにコミュニケーションが取れる方法を見つけましょう。

○　積極的に声掛け

来日直後で不安な気持ちが大きく、自分からアピールできないことも考えられます。「アピールがない」＝「できている」と考えるのではなく、担任からも積極的に声をかけるようにしました。

もっと知りたい

『「やさしい日本語」の手引き』
【愛知県社会活動推進課多文化共生推進室】
「やさしい日本語」を学ぶ教材資料が掲載されています。

事例 11　授業に参加するための支援　【日本語指導・教科指導】

中学校2年生の A さん（編入後3か月経過）についてです。中学校1年生までの学習内容については母国で習得してきていますが、言葉の壁があり、授業に参加したくても参加できない状況です。

授業に参加できるようにするためには、どのような支援が必要ですか？

このような支援・指導をしました

○　学習計画を作成しました

外国と日本では、文化も違えば教育カリキュラムも違います。まず、A さんが何を学んでいて、どういったことに興味をもっているのかを確認しました。その際、母国で習っているからできるはずだと思い込まず、できることと、苦手なことを把握することを意識しました。簡単なテストや聞き取りを基に、好きなことや得意なことと関係付けて学習計画を立てました。

学習計画は、例のように1時間の授業の中で、A さんがどのように参加できるかや、どこまでできることを目標とするのかを考えながら作成しました。また、単元を通して見通しをもって授業に参加できるように学習計画を立てました。

例 【A さんのできること・苦手なこと】

- 数学は分数の計算が苦手だが、それ以外の計算問題やグラフ、図形等はある程度できる。
- 一次関数の授業では、文章問題は言語の壁があり苦手だが、グラフから数値を読み取ることはできる。

【どのように参加できるか等を考えて作成した、A さんの学習計画】

- 数学では、グラフの特徴を読み取り、グラフの関係を式で表すことができるようにしよう。
- 理科の電流と電圧の関係性を調べる授業では、電流計や電圧計の数値を表に書き写し、グラフに表すところまでできるようにしよう。

○　支援員や他教科の教員との連携を深めました

学習計画をもとに、支援員や他教科の教員と打合せを行いました（例：数学では、グラフから立式ができた→グラフが書けるのであれば、理科では実験結果の数値を基にグラフを書くことができるだろう）。連携を図ることで、学習面で、内容を関連付けたり、連続性をもたせたりすることができました。生活面でも、在籍学級の担任と支援員の間で、一貫した対応や支援をすることが可能になりました。

○　環境の工夫をしました

座席を 2 列目にしました。2 列目だと、教員の支援もしやすく、本人も周りの状況を把握しやすいです。プリントには、ルビ振りをしたものを使用したり、「やさしい日本語」を用いたりして、授業に参加しやすい環境を整えました。教科に応じて、キーワードや重要語句にルビ振りをした一覧表を準備したところ、便利で使いやすいようでした。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　環境を整えて、チームで対応しました

担任 1 人ですべてを支援するのではなく、環境を整え、さまざまな教職員と協力しながら、長期的に支援をしていきました。

もっと知りたい

「学校教育における JSL カリキュラム（中学校編）」
【文部科学省】
外国人生徒が「日本語で学ぶ力」を身に付けることができるように作成されたカリキュラムが掲載されています。

「日本語指導ハンドブック」
【東京都教育委員会】
日本語指導の内容ごとに指導のポイントや留意点、ワークシート等が掲載されています。

事例 12　学習意欲を向上させる支援　【日本語指導・教科指導】

小学校5年生の A さん（4年時編入・日常会話程度の日本語）についてです。子供同士でコミュニケーションはとれていますが、在籍学級での教科学習内容の理解が難しくて授業に集中できていません。そのため、授業中に寝てしまうことがあったり、欠席が増えたりしています。

前向きに学習に取り組むためには、どのような指導・支援が必要ですか？

このような支援・指導をしました

指導者と一対一だと前向きに学習に取り組むことができるため、日本語指導担当教員と連携を取りながら、取り出し授業で A さんの習熟度に合わせた漢字や音読の授業をしてもらうようにしました。その際、岩倉市日本語適応指導教室の教材を活用しながら取り組むことで、A さんがどの学年レベルの漢字習熟度なのかを、担任と日本語指導担当で把握することができました。

在籍学年の国語の物語文については、物語文にルビを振ったり、「やさしい日本語」で話のあらすじの説明をしたりするなどの支援を行いました。在籍学級での授業では、担任の説明を支援員に「やさしい日本語」で説明してもらうなど、少しでも A さんが学習に取り組めるような工夫をしています。また、個別の支援を受けながら作ったノートやまとめの新聞等を、担任がその都度、称賛したことで、A さんに少しずつ自信がつき、自分の力でノートや連絡帳を書く習慣がついてきました。こうした多くの教員が連携した取組を通して、学習意欲の向上につなげています。

算数では、計算問題の仕方が分かれば繰り返し計算練習に取り組むことができるので、最初の説明を担任や日本語指導担当が個別に行い、計算練習に取り組めるように支援しています。ドリルの問題を正解すると A さんは、とてもうれしそうに「次はどの問題をやるの」と、意欲的に取り組む姿が見られます。

各教科の単元テストでは、担任がルビを振ったり、語彙の説明をしたりする支援をしています。今では、タブレット端末を利用し、本人が自分でルビを振ることもできるようになってきました。タブレット端末は、多くのイラストや写真等の視覚支援もあるため、語彙の理解にもつながりました。

学級全体への指示についても、少しでも A さんが集中して聞けるように、「やさしい日本語」を意識し、「一つ目は」「二つ目は」と順番を明確にして、一文で話すことを心がけています。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　共通理解を図りながら進めました

担任だけでなく、本人に関わる教員が A さんへの支援について共通理解ができている状態で指導に当たることで、学習意欲の向上につなげることができました。

○　難しい言葉を使わず、できるだけ簡単な日本語で話しました

「やさしい日本語」を使って話したり、質問したりすると、伝わりやすいです。何を伝えたいのか要点をしぼって、分かりやすく伝えられるようにしました。

もっと知りたい

『「やさしい日本語」の手引き』
【愛知県社会活動推進課多文化共生推進室】
「やさしい日本語」を学ぶ教材資料が掲載されています。

「岩倉市日本語適応指導教室」
【岩倉市教育委員会】
各教科で活用できる教材データが掲載されています。

事例 13　特別支援教育　【日本語指導・教科指導】

小学校５年生Ａさん（外国籍･8歳で来日）が転入してきました。Ａさんは、両親の仕事の関係で２回の国内転居をしており、本校は３校目になります。簡単な日常会話はできます（家庭では母語で会話）。初めの2週間は落ち着いていましたが、他の児童とのトラブルや、学習に対する後ろ向きな姿が目立つようになりました。

Ａさんが抱えている課題は、発達の特性によるものだと感じています。どのように支援･指導を進めればよいですか？

このような支援をしました

○　まずは…、困り感を把握しました

「めんどくさい」という言葉で、学習や活動に後ろ向きなＡさんでしたが、聞き取りを行うと、日本語や学習言語が十分に理解できていないことや、「分からない」ことを他の児童に知られたくないため、隠してきたことが分かりました。他の児童とのトラブルも、新しい環境の中でのストレスや日本語で十分なコミュニケーションが取れないことから起きているということが分かりました。

○　次に…、児童の現状を伝え、保護者の願いをしっかりと聞き、不安感に寄り添いました

保護者は簡単な日常会話程度しか日本語を話せないため、母語通訳者に入ってもらい、Ａさんの現状を伝える場を設定しました。受入れ時に生育歴等は聞き取り調査をしていますが、その時に聞くことができなかった発達に関する情報や保護者の願い等を聞くことができました。

- 母国の健診（3歳児健診に該当するもの）で、医師から発達の遅れがあるかもしれないと言われたことがある。
- 幼少の頃は物静かで、育てにくさ等を感じたことはない。
- 転校前の学校でも日本語指導を受けていたが、なかなか学習内容が定着しないと言われた。
- 外国人ということ、日本語がうまく話せないことで、児童がいじめにあったことがある。
- 母国に帰る予定はないため、日本の中学校･上級学校に進学して、Ａさんのやりたいことができる人生を歩んでほしい。　等

○　そこで…、校内で児童情報を共有し、今後の支援方法を検討しました

Ａさんや保護者との面談後、Ａさんが抱える課題が言語によるものだけなく、発達による可能性が出てきました。通常の管理職への報告だけでなく、特別支援コーディネーターや学級担任、特別支援学級担任にも同席してもらい、Ａさんの現状や課題、保護者の願い等の情報を共有し、今後の支援方法を検討しました。支援方法の検討は複数回行い、検討していきました。

※ 外国人児童生徒が抱える課題については、言語によるものか、発達によるものか、判断がとても難しいと言われています。複数の目で対象児童生徒を観察し、記録をもとに検討会を重ねることが大切です。

○　Ａさんには特別支援学級での支援も必要だとなりました…、しかし…

特別支援教育の話を保護者に伝えると、「個別にサポートしてもらえるのは、うれしいけれど、うちの子には必要ない」「うちの子は頭がおかしいわけではない」「うちの子は普通であって、特別ではない」と話されました。

外国人保護者にとっては、日本の特別支援教育の情報がないため、児童のために必要と分かっていても、受け入れることができず、トラブルにつながる場合があります。国によっては、特別支援学級という場所は、医師から脳神経に異常があると認められた子供が通うところで、指導者も特別支援の専門職であるというケースもあるようです。事前に保護者の国の特別支援教育について確認しておくとよいでしょう。

○　そのため･･･

母語通訳者や特別支援コーディネーター同席のもと、保護者に医療機関等の相談機関、日本の特別支援教育の情報を提供し、Ａさんの課題が少しでも解決できるよう、働きかけました。

その後、母語通訳者も同伴して、児童相談所で発達検査をしたところ、発達の遅れがあることが分かりました。

○　その結果･･･、特別支援学級の体験後、特別支援学級へ入級しました

児童･保護者、学校とで今後の支援･指導の方針を検討し、日本語指導の取り出し時間を増やし、特別支援学級を体験する機会を設けました。

在籍学級から離れて学習する時間が増えることに対して不安を抱いていたＡさんでしたが、日本語指導と特別支援の体験を同時に行う中で、安心して学習に取り組めるようになっていきました。在籍学級の児童には、該当児童のがんばりを伝え、学級の輪の中で過ごせるように働きかけました。

現在は中学生になり、本人の目標である高校進学に向かって、勉強に励んでいます。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　児童の実態を把握しました

児童の悩みに寄り添い、児童や保護者から聞き取りを行いながら、実態を把握しました。

前任校の日本語指導担当者等から児童に関する情報を得ました。

○　外部の相談機関の情報を提供しました

専門的なアドバイスをもらえたり、母語で相談できたりする機関の情報を提供しました。

○　学校全体で、児童の支援･指導方法を検討しました

就学指導委員会等で児童の実態を共有し、支援の仕方や指導方法を検討しました。

もっと知りたい

「発達障害に関する外国人保護者向けパンフレット」

【国立障害者リハビリテーションセンター】

子供の発達に心配なことがある保護者向けパンフレットが掲載されています。

事例 14　家庭との連絡方法　【保護者との連携】

小学校4年生の A さん（編入後3か月経過・挨拶程度の日本語を習得）の保護者に連絡をしても、なかなか電話に出てもらえません。電話がつながっても、言葉の壁があり、伝えたいことがうまく伝わりません。普段はもちろんですが、緊急連絡時が心配です。

保護者と連絡を取り合うよい方法はありませんか？

このような対応をしました

4月下旬、保護者の方と相談をし、学校から連絡をする場合に連絡が取りやすい手段を電話、手紙、FAX 等から選んでもらい、電話で連絡を取り合うことになりました。

しかし、保護者の日本語が片言なこともあり、なかなか電話がつながらず、必要な連絡が折り返しもない状況が続きました。そこで、「やさしい日本語」の手引きを参考にして、簡単な日本語（「ママ、お仕事、忙しいですか」「何時に電話できますか」等）で話すように心がけました。すると、「仕事忙しい」とか「電話の時間分からない」などと次第にコミュニケーションが取れるようになり、少しずつ A さんの家庭での様子や、親子の関わりについての話ができるようになってきました。しばらくすると、「では、明日の〇時に電話しますね」と具体的に約束をすると、「分かりました」と言って、約束通り電話に出てくれるようになり、そのうちに折り返しの電話もくれるようになりました。今は連絡したい要件があるときには、事前に「〇がつ〇にちの〇時にでんわします」と児童の連絡帳に手紙を書き、「ママに見せてね」と声をかけるようにしています。

言葉の壁については、市の通訳者が来校したときに、懇談会や弁当が必要な日等の重要な連絡についての通訳をお願いしました。通訳者がいない面談では、「やさしい日本語」を使って説明したり、保護者が使用している翻訳アプリを活用したり、できるだけ言葉の壁を低くするように努めたところ、連絡が取りやすくなりました。また、保護者の方と連絡が取れない場合の連絡先についても教えてもらった結果、連絡が取りやすくなりました。

保護者との連携を進めるうえで留意したこと

〇　言葉の壁を低くするため、難しい言葉を使わず、「やさしい日本語」で伝えました

「やさしい日本語」で要点を絞って伝えたり、質問したりする（例：✖「お忙しい中申し訳ありませんが、今お時間よろしいでしょうか」 〇「今忙しいですか、少しの時間話せますか」）と、コミュニケーションが図れました。保護者の方に、こちらの話が「分かる」と思ってもらえると、保護者の意識が「学校からの連絡は分からない嫌なもの」から「連絡は必要なものだから聞こう」というように変化します。「やさしい日本語」で伝えることで、話の内容を理解してもらえ、連絡を取りやすくなりました。

〇　通訳者を活用しました

懇談会や説明会等、予定されている面談には通訳者を依頼する必要があります。しかし、それが難しい場合には、保護者の知人の中で日本語が分かる方に同席してもらうことも有効です。

〇　なるべく事前に連絡の約束をしました

重要な連絡は確実に伝えられるよう、連絡帳等で、事前に連絡の約束をしました。

もっと知りたい

『「やさしい日本語」の手引き』
【愛知県社会活動推進課多文化共生推進室】
「やさしい日本語」を学ぶ教材資料が掲載されています。

事例 15　保護者の学校参加　【保護者との連携】

中学校2年生のAさん（編入後1年経過）は、すっかり日本の学校に慣れ、生き生きと生活しています。しかし、日曜日の授業参観や体育祭に保護者が参加してくれないため、寂しい思いをしています。

保護者の方に学校行事等に参加してもらうためには、どのような言葉がけが必要ですか？

このような対応をしました

○　なぜ参加できないのか、文化的背景に目を向けました

日曜日の午前中に家族で教会に行くため、午後からの行事であれば参加しやすいということを知りました。幸い、文化祭でＡさんのクラスの合唱は午後からであったため、事前に午後の時間を伝えると、保護者の方が参加することができました。

○　保護者への参加を促すために、事前に説明を行いました

年間行事等で事前に分かっている場合は、最初の面談の際に伝えるようにしました。特に海外にない行事（文化）の場合、行事の趣旨等の説明を行いました。保護者によっては、学校に行く習慣自体があまりない場合もあるので、通訳者を交えて長期休業中に保護者会を行い、必要な情報を事前に伝えしました。

○　便りの工夫をしました

１か月前には詳細な便りを渡すようにしました。その際、翻訳したものや、ルビ振りをしたものを渡すようにしました。学級通信等の場合は、生徒のがんばりが伝わるように写真を載せ、「〇〇祭まであと〇日」と日程が分かりやすいように明記しました。大切な便りには、便りの右上に「重要」と記したり、☆印をつけたりし、保護者の方に見てもらえるようにしました。

保護者との連携を進めるうえで留意したこと

○　保護者の気持ちを尊重しました

言語や文化が違う中での学校生活になります。日本の学校教育を主張するだけでなく、保護者の気持ちを十分に聴き取り、保護者が納得できるように話を進めました。

○　「伝わりやすさ」を意識して伝えました

行事の１か月前には、詳細が伝わるように心がけました。翻訳、ルビ、通訳、やさしい日本語等、できるだけ保護者に伝わりやすい形で伝えることを大切にしました。

もっと知りたい

「かすたねっと」
【文部科学省の情報検索サイト】
保護者へのお知らせに利用できる多言語対応の文書等が検索できます。

「外国人児童生徒受入れの手引き」（P15～P16）【文部科学省】
保護者との関係づくりについて掲載されています。

事例 16　進路相談の進め方　【保護者との連携】

進路相談を進めていますが、中学校2年生のAさんも保護者も具体的な進路を思い描くことができません。どのように進路相談を行う必要がありますか？

また、外国にルーツをもつ生徒の進路選択について、具体的な事例を紹介したくても情報がありません。どうすれば情報を得ることができますか？

このような支援・指導をしました

国によって受験そのものが存在しなかったり、義務教育のために、すべての生徒が進学できるようになっていたりするなど、高等学校への進学制度は国によってさまざまです。保護者や生徒が戸惑わないように、対象者の母国の学校制度を教員が理解したうえで、日本の進学制度について伝えるようにしました。日本では、高等学校に入学するには入学試験に合格する必要があることや、学費等の準備が必要なことなど、進学に向けてのスケジュールを丁寧に説明しました。中学3年生になってから話を進めるのでは学費等の準備等間に合わないケースがあるため、中学校入学時（小学校編入であれば、小学校で）等、できる限り早くから伝えていきました。

○　外国人生徒向け進路説明会を行いました

①日本の教育制度について　②上級学校の種類について　③受験制度について　④学費について

スライドを使って「やさしい日本語」で伝えました。加えて、通訳の方に保護者や生徒の疑問点に対して、母語で説明をしてもらいました。

※　市育委員会が主催する進路説明会に参加することで、NPO 法人等とつながりをもち、高等学校の具体的な情報を集めることができます。

○　卒業生からのビデオメッセージを視聴させました

外国人児童生徒等の卒業生に依頼して、在校生に向けたビデオメッセージや手紙を書いてもらい、在校生に伝えました。身近な卒業生の活躍は、生徒が具体的なイメージをもつきっかけになりました。また、卒業生を講師として招き、中学校在籍時、進路についてどう考え、どう選択したかなど、体験談を聞く機会も設けました。

○　受入れ時の面談を大切にしました

保護者との受入れ時の面談で、日本の高等学校等への進学について話題にしました。その際、将来的に帰国する予定がある家庭についても、日本語での学習に励むよう話をしました。将来的に帰国の予定が変わり、日本に滞在することになった事例も少なくないためです。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　早い段階から継続的に正しい情報を提供しました

地域とのつながりが薄い家庭ほど、日本の進学制度に関する情報を知らないことが多いため、教員が懇談会等を通して情報を提供しました。早い段階から家庭と連携を図り、進路についての話を継続的にしていきました。

もっと知りたい

「相談員のための多文化ハンドブック ＝子どもの教育編＝」
【公益財団法人　愛知県国際交流協会】
さまざまな国の学校制度が掲載されています。

「外国につながる子どもたちの進路開拓ガイドブック つなぐ･ひらく･未来 2」
【愛知県社会活動推進課多文化共生推進室】
外国人生徒や保護者向けの進路情報がまとめられた冊子が掲載されています。

事例 17　家庭内でのコミュニケーション　　【共生・アイデンティティー】

小学校5年生のAさん（3年前に編入・外国と日本のダブル国籍、家庭ではカタコトの日本語で会話）の保護者から「子供は日本語を話せるようになってきたが、母語を忘れてきているため、家庭内での親子の深いコミュニケーションが難しくなっている」と相談を受けました。

児童や保護者に、どのような働きかけが必要ですか？

このような支援・指導をしました

○　外国人保護者の悩みや不安に寄り添い、A さんの実態を把握しました

母語通訳者と一緒に保護者と面談を行いました。子供の学校生活や学習の内容、子供の将来のことなどについて、母語で話し合えないという悩みや、ルーツを大切にして欲しいという願いなど、編入から現在に至るまでの思いや不安等を把握しました。

その後、母語通訳者にも同席してもらい（A さんは日本語で自分の考えを伝えることができますが）A さんとの面談を行いました。A さんが抱えている言語や習慣ストレス、学校生活での喜び等を聞き取りながら、保護者の願いや母語の大切さを伝えました。また、母語通訳者に A さんの母語力を確認してもらいました。

○　外国人保護者と児童の実態を共有しました

その後、A さんからの聞き取った内容を保護者に連絡し、併せて、下記の内容を伝えました。

- 家庭では母語で会話をすること（保護者が一番自信のある言語）
- A さんに母語の重要性や、ルーツの素晴らしさを学ぶことができる内容を学校でも指導すること
- 今後も母語で相談できる機関等の紹介
- 必要に応じて、何度も面談の場を設けること

その後、児童と一緒にルーツにかかわることを調べ、日本と母国の良さをまとめたり、保護者の思いを考えたりする機会を設けました。日本語教室に通う児童や、クラスの児童へ発表する場を設け、日本で生きる外国人として自信をもつことができるようになってきました。しかし、児童の母語に対する価値が高まらないと、母語の定着につながらないため、継続的にサポートをしていくことが重要であると感じました。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　保護者と児童の悩みを把握しました

母語通訳者や語学相談員に入ってもらい、保護者と児童が困っていることを丁寧に確認しました。

○　母語の重要性を伝えました

母語通訳者や語学相談員からも、母語の重要性を伝えてもらいました。

○　児童に母国について調べさせました

児童が興味をもっていることから調べ学習を行い、母国の良さに目を向けられるようにしました。

○　母語で相談できる場の情報提供しました

県の相談機関等、母語で相談できる窓口の情報を提供しました。

もっと知りたい

「母語教育サポートブック『KOTOBA』」【愛知県社会活動推進課多文化共生推進室】

子供たちに母語や母文化の大切さを教えたり、母語による学習支援等の取組みを行ったりする際に参考になる、母語教育サポートブックが掲載されています。

事例 18　悩み相談　【共生・アイデンティティー】

中学校2年生のAさん（9月編入）についてです。編入後、しばらくは周りの生徒が話しかけ、友達の輪の中にいる姿がみられました。しかし、3ヶ月ほど経った現在は、一人でいることが多いようです。さまざまな教員が、「大丈夫？」と声をかけると、「はい、大丈夫」と言うものの、表情は暗いままです。

本人や周りの生徒に、どのような支援・指導を行えばよいですか？

このような支援・指導をしました

まずは「本人の思い」を知ることが大切だと考え、市の語学支援員による「母語相談」を実施しました。

第１回の母語相談は、担任も参加しました。母語（タガログ語）で自分のことをどんどん話す A さんの姿に担任は驚くとともに、A さんが言ってた「大丈夫」は本当の「大丈夫」ではなかったと実感しました。この相談の中で、Aさんから出てきたのは、

- 勉強が遅れていることが心配
- 日本語が正しく話せているか分からなくて、話す自信がない。日本語を話すと笑われるかもしれない
- 周りの子は、自分のことをどう思っているのか、気になる
- 中学校を卒業したらどうなるのかが不安

ということでした。担任は、「周りの子は、あなたを仲間だと思っている。間違えても、大丈夫だよ」という思いを、語学支援員を通して A さんに伝えました。A さんの気持ちを担任や語学支援員が共有できたことで、A さんの表情も柔らかくなってきました。また、学級の生徒にも、A さんが不安に思っていることを伝えたところ、学級の生徒が声をかける姿が見られました。

母語相談での内容を受け、日本語初期指導の内容を見直しました。教科による指導の割合を増やし、初期の日本語指導は補足的に行うこととしました。また、A さんが得意な教科は、取り出しをせずに、他の生徒と一緒に授業が受けられるように時間割を調整しました。また、友達関係を配慮し、座席を変更しました。

第2回の母語相談は、母親にも参加してもらいました。その中で、A さんが不安に思っていた「進路」について、話題にしました。日本の受験システムを伝えたり、母親の思いを聞いたりすることができました。また、ボランティア団体が行っている「日本語教室」があり、週末に日本語が学べることも伝えました。母親も A さんも、その教室に参加し、日本語の習得を目指していく道筋を見いだすことがきました。

その後、学級で笑顔が見られるようになり、休憩時間や当番活動等では、自分から友達の輪に入って一緒に活動する姿が見られました。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　母語相談や通訳者を活用しました

母語で自分の気持ちを表現することは、心を安定させるうえで大切なことだと考え、面談は通訳者と一緒に行いました。また、生徒に通訳させるのではなく、第3者である通訳者を入れることで、当事者が互いの素直な気持ちを共有することができ、的確な支援につなげることができました。

もっと知りたい

「外国人児童生徒受入れの手引 改訂版」
（P43）【文部科学省】
児童生徒の適応状況（時期）にあった指導が掲載されています。

事例 19　学級での関係づくり　【共生・アイデンティティー】

中学校1年生のAさん（9月編入・ひらがなを読むことができるが意味の理解はできていない）に対して、受入れ側の生徒も話をしたいが、話をすることができず困っています。

Aさんが周りの生徒との関係を築くために、どのような支援を行えばよいですか？

このような支援・指導をしました

班活動や授業だけの関わりだけでなく、レクリエーションやミニゲーム等を意図的に行い、言語以外の関わりの機会を増やすことで、自然にコミュニケーションが取れるようにしました。

○　ミッション

ミッションは、やさしい日本語を学びつつ、コミュニケーションをとることを目的にした活動です。ミッションは、日本語指導担当から外国人生徒に出されます。この日のミッション（資料1）は、「～ことができますか？」です。外国人生徒は、在籍学級の受入れ側の生徒と関わることで、ミッションをクリアしていきます。ミッションカードのメモ欄の数を調整することで、関わる生徒数を調整できます。受入れ側の生徒も答えやすく、やさしい日本語を用いて交流することができます。

【資料１　ミッションカード】

○　朝の活動の工夫

朝の会の 5 分間を使って、簡単なコミュニケーションの時間を設けました。班ごとに、0～9までの話題（資料2）を用意し、興味のある話題について質問し合います。話しているうちに、言葉だけでなくジェスチャーや表情でも伝え合うことができます。また、互いの好きなものや特技を知ることのきっかけになったり、自分の体験や経験を伝えたりする表現の勉強にもなったりします。

【資料２　０から９までの話題】

0	今、はまっていることは？
1	好きなパンの種類は？
2	朝起きて最初にすることは？
3	もし宇宙人に会ったらどうする？
4	遊園地で乗りたい乗り物は？
5	願い事が一つだけ叶うなら？
6	好きな映画は？
7	今、挑戦してみたいことは？
8	海で叫べるなら何を叫ぶ？
9	好きなイベントや行事は？

○　歓迎会やメッセージカード

編入時期が分かっている場合、歓迎会の準備をしました。歓迎会と言っても、大掛かりなものではなく、黒板に「Mabuhay!（マブーハイ）」（タガログ語の挨拶で「ようこそ!」）と書いたり、絵を描いたりして迎え入れるだけでも互いに話しやすい雰囲気になりました。また、事前に自己紹介カードやメッセージカード等を作成することで、互いのことを知ったり、話したりするきっかけになりました。外国人生徒が来てからの対応ではなく、来る前に準備をしておくことで、外国人生徒だけでなく、受け入れ側の生徒も安心して迎え入れることができました。

【資料３　自己紹介カード】

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　互いに楽しめつつ、安心できる環境を作りました

無理に生徒同士の仲をつなごうとするのではなく、生活の中で楽しく、自然な関係性を育むことを意識しました。色々な生徒と関わることで、コミュニケーション能力や言葉の勉強にもなります。

もっと知りたい

『「やさしい日本語」の手引き』
【愛知県社会活動推進課多文化共生推進室】
「やさしい日本語」を学ぶ教材資料が掲載されています。

事例 20　友達とのトラブル　【共生・アイデンティティー】

小学校5年生のAさん（4年秋編入、単語1～2個をつなげて話す程度の日本語を習得）がきっかけとなるトラブルが多く、毎日周りの児童が苦情を訴えます。このままAさんが自分の気持ちを表現することができずに手を出してしまう状況が続き、大きなトラブルになってしまうことが心配です 。

Aさんや周りの児童に、どのような支援・指導を行えばよいですか？

このような支援・指導をしました

最初はクラス内のトラブルだったので、すべて担任が対応していました。しかし、「どうして〇〇したの」と理由を聞いても首をかしげるだけで、話そうとしません。十分な指導ができないまま、トラブルが次第に他のクラスにも広がってしまったので、日本語指導担当の取り出し授業の際に、A さんの話をじっくり聴いてもらうことにしました。すると、「日本語がうまく話せないから、周りから変だと思われるのが嫌だけど、学校の先生は、学校では日本語で話すようにしなさいと言う。だから話したくない。周りと関わりたいけれど、関わり方が分からない」と思っていることが分かりました。そこで、自分の気持ちを表現するときは母語でもよいことを伝え、担任、学年主任、日本語指導担当、A さんで共有しました。

次に、周りの児童に、A さんは仲良くしたいと思っていることや、日本語でうまく思いを伝えられないと悩んでいることを伝えました。そのため、A さんと接する際には「やさしい日本語」で話すとよいことを伝えると、「そうだったのか」と理解を示す児童たちの様子が見られました。

その後は、担任、学年主任、日本語指導担当等が A さんに意識的に声掛けをするようにし、日々の A さんの気持ちを少しでも表現させるようにしました。トラブルが起きたときにも、英語な得意な教職員が通訳をしたり、それが難しいときは、翻訳アプリを使ったりしながら A さんの話を丁寧に聞くようにしています。

まだまだトラブルは多いですが、教職員が丁寧に話を聞く機会を設けたため、最近は、教職員が相手であれば、日本語の単語で少しずつコミュニケーションが取れるようになりました。周りの児童も A さんの状況を理解し、対応の仕方が優しくなった子が増えました。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

〇　A さんの思いを聞き取りました

母語で話を聞き取ることが有効でした。語学相談員等の通訳者に同席してもらいました。難しい場合は、翻訳アプリを活用しています。

〇　共通理解を図りながら進めました

担任だけでなく、A さんに関わる教職員が、A さんへの指導・支援について共通理解ができている状態で支援・指導に当たることで、学校が A さんにとって安心できる場となるようにしました。

〇　難しい言葉を使わず、「やさしい日本語」で伝えました

単語をつなげて短い一文で話したり、質問したりすると、伝わりやすいです。何を伝えたいのか要点をしぼって、分かりやすく伝えられるようにしました。

もっと知りたい

『「やさしい日本語」の手引き』【愛知県社会活動推進課多文化共生推進室】
「やさしい日本語」を学ぶ教材資料が掲載されています。

「外国人児童生徒受入れの手引 改訂版」（P39～47）【文部科学省】
在籍学級での外国人児童生徒等の受入れについて掲載されています。

事例２１　アイデンティティーを確立する　　【共生・アイデンティティー】

小学校6年生のAさん（日本生まれ、日本育ちの外国籍）についてです。就学前から日本人の子供たちと教育を受けてきたため、言語の不自由さは感じていませんでした。しかし、自分の母国に自信をもつことができないため、自分の大切なルーツを隠してしまう傾向があります。

本人がアイデンティティーを確立するためには、どのような支援・指導が必要ですか？

このような支援・指導をしました

○　児童の声に耳を傾け、実態を把握しました

Ａ さんの思いを聞く機会を設けました。日本語が分からずに苦しんだ幼少期や、外国人ということでクラスメイトにからかわれたこと、保護者が日本語を話せないため恥ずかしい思いをしたこと等を話してくれました。

○　児童から聞き取った内容を保護者と共有し、今後の教育活動に協力してもらえるよう働きかけました

母語通訳者を介して、児童が抱えていた悩みを保護者に伝えました。保護者は、児童がこれまで抱えていた悩みを知り、少し不安を感じていました。これまで出会ってきた外国にルーツをもつ児童のケースを紹介したり、Ａさんが自分自身のルーツに誇りをもてる取組を学校で行いたいことを伝えたりしながら、今後の学校における教育活動に協力してもらえるよう働きかけました。

○　アイデンティティーを確立するためには･･･

アイデンティティーの問題は、その児童に問題があるわけではなく、周りの環境や理解によって大きく左右されます。そのため、「外国にルーツをもつ児童には、母国のことをもっと知り、誇りをもち、自分自身のルーツを大切にしてほしい」「日本人児童には、他文化に触れて国際理解を深めてほしい」との願いのもと「ワールドウィーク」という国際理解教育活動に全校で取り組むことにしました。

○　ワールドウィークを行いました

外国にルーツをもつ他の児童も巻き込みながら、外国にルーツをもつ児童が母国の言語や文化、習慣、教育のシステム、日本との違い等を全校に発信する「ワールドウィーク」（全校集会や校内放送）を行いました。外国にルーツをもつ児童は、図書館や Web 等の情報を活用しながら、自分のルーツに関することを調べたり、保護者へのインタビューをしたりしながら、母国のことをまとめ、母国への理解を深めていきました。

２ヶ月に１回、「ワールドウィーク」を行い、児童が母国について調べたことなどを校内 Web 放送で発表しました。「ワールドウィーク」の期間中は、昼の放送時間を使い、「おはよう」「ありがとう」「さようなら」等の簡単な言葉や音楽を紹介し、全校で対象の国の言語を使ってコミュニケーションを図るよう促したり、国のイメージカラーの小物を身に付けたりしながら、教員・全校児童と「ワールドウィーク」を楽しみながら、国際理解を深められるよう取り組みました。

※　本人や保護者の母語や母国への思いはさまざまであり、ワールドウィークを実施する前に、本人や保護者に確認する等、事前に配慮が必要です。

【外国にルーツをもつ児童の声】

・ 自分の国のことをお父さんやお母さんから聞いて、初めて知ることがいっぱいあった。
・ クラスの友達が、母国の食べ物のことや、学校のことを聞きに来てくれてうれしかった。
・ みんなが自分の国の挨拶をしてくれてうれしかったし、楽しかった。　等

【日本人の児童の声】

・ 本やテレビで見たり、聞いたりしたことはあったけれど、ワールドウィークの発表を聞いて、よりよく分かった。
・ 外国のいいところを見つけることができた。大人になったら行ってみたい。
・ 外国にルーツをもつ友達は、私たちより言葉等を覚えるのが大変なのに、がんばっていると思った。
・ 私たちの学校にはいろいろなルーツをもつ子がいて、とてもすてきな学校だと思った。　等

○　ワールドウィークを通して・・・

外国にルーツをもつ児童は、母国の文化や習慣等を学び、誇りをもつことができた。外国人保護者に協力をしてもらうことで、家庭内で親子の絆も深めることもできた。日本人児童は自然と外国にルーツをもつ児童と関わりをもつようになり、国際理解を深めることができた。

このような活動は、学校行事の１つとして単発的に終わってしまうことが多いため、定期的に「ワールドウィーク」を実施し、より国際理解を深め、外国にルーツをもつ児童のアイデンティティーを育んでいく必要があります。

また、「ワールドウィーク」のような行事をもたなくても、日常の学校生活や教育活動のなかで、少しの工夫と努力があれば個々のアイデンティティーを確立し、国際理解を深めていけると感じます。

支援・指導を進めるうえで留意したこと

○　外国にルーツのある児童が母国に目を向けられるよう、働きかけました

児童が興味のあることから調べ、全校に発信する情報をまとめました。
（挨拶・食文化・国土・風習・学校事情等）

○　外国人保護者の協力を得て、学校と家庭とのつながりをつくりました

「ワールドウィーク」の内容を保護者へ伝え、協力が得られるよう働きかけました。
（インタビュー・実物の提供等）

○　全校に発信し、学校全体で取り組みました

各国の言語での挨拶やイメージカラーの小物等を身に付け、全校で盛り上げていきました。

もっと知りたい

「外国人の人権尊重に関する実践事例について」
【文部科学省】
外国人の人権尊重に関する実践事例について33事例が掲載されています。

ホームページ紹介

外国にルーツをもつ児童生徒への支援・指導に役立つホームページを紹介させていただきます。
ぜひ、ご活用ください。

○ 「外国人児童生徒受入れの手引 改訂版」
【文部科学省】

○ 「かすたねっと」
【文部科学省】

○ 「外国人児童生徒等教育に関する動画コンテンツ」
【文部科学省】

○ 「DLA（外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント）」
【文部科学省】

○ 「ぐんまの外国につながる子供たちの学び応援サイト ハーモニー」
【群馬県総合教育センター】

○日本語指導ハンドブック
【東京都教育委員会】

○ 外国人児童生徒教育資料
【豊橋市教育委員会】

○岩倉市日本語適応指導教室
【岩倉市教育委員会】

○ 外国人児童生徒指導資料
【愛知県教育委員会】

○ 「やさしい日本語」の手引き
【愛知県社会活動推進課多文化共生推進室】

○ 母語教育サポートブック『KOTOBA』
【愛知県社会活動推進課多文化共生推進室】

○ 外国人児童生徒支援
【愛知教育大学 外国人児童生徒支援リソースルーム】

○ 民間団体検索
【公益財団法人愛知県国際交流協会】

事例集「はじめの一歩」を御活用いただき、誠にありがとうございます。
この事例集を、さらにより良いものにしていくため、現在紹介している Web サイトのリンク切れや、掲載するとよい Web サイトの紹介、愛知県内の小中学校等が参考にできる事例の紹介等がございましたら、右の二次元コードから御連絡をお願いいたします。

愛知県教育委員会 義務教育課